先進地から学ぶ

一支国博物館（仮称）建設等に関する調査特別委員会　視察報告

《日程：平成20年3月27日～ 28日》

●兵庫県立考古博物館（展示設計；乃村工藝社、コンピューター関連整備；丹青社）

平成19年10月にオープン。冬場（閑散期）を挟んでいるにもかかわらず、入館者数はすでに10万人程であり、年間目標の14万3千人は確実に達成すると思われる。緑地の少ないこの地域に遺跡公園と一体的に整備された結果、近隣住民の来館も多い。加えて、小学校高学年にもわかりやすい展示内容と体験プログラムを展開することによって、親子3世代の利用が非常に多くなっている。ただし、研究者などには物足りない内容となるので、企画展や研究会、各種講座を開催することで取り込む工夫がなされていた。

また、県下の他の県立文化施設と共同事業を企画するなど、連携を密にして相乗効果を生み出している。

広報活動には特に予算は組まれておらず、ホームページや先に述べたネットワークを使って情報発信がなされている。マスコミをうまく活用することによって、予算をかけずに大きな宣伝効果を挙げている点は特筆すべきところである。

建物側壁は60度ほどの急傾斜ながら芝施工が施されていた。ただし、施工当初はネットなどによる押さえが必要であるとのこと。屋上部分は、空調設備等の関係で凹凸が多く、広場と呼べる程のスペースは無い。現在は芝が主であるが、将来的にはチガヤ（イネ科）を主にしていく計画。基本的に「自然のままに」というコンセプトから、ほとんど手入れはせずに進める方針であった。

年間の維持管理費は、8 ～ 9千万円。光熱水費と施設管理費がほぼ半々である。芝の管理等は施設管理費の中で周辺環境整備を含む清掃業務の中で委託されており、委託料は1,400万円。

ボランティアの育成は5カ年計画で進めてきた結果、現在約100人の登録がある。運営については、全体の取りまとめ以外は各ボランティア団体による自主的なものとなっている。これとは別に、河川管理や山林管理等の各種ボランティアと連携することにより、交流が広がり賑わいを創出している。

●明石市立文化博物館（指定管理者；乃村工藝社）

平成19年度より指定管理者制度を導入。期間は3年間で、1年毎に協定更新。

運営は館長1人、事業・広報部門6人、学芸員5人、管理部門1人の体制であたっており、毎月市担当者と打ち合わせを行っている。報告はメールによる日報・月報・年報。

指定管理料は約1億6,500万円であり、収入としては展覧会収入で約1,500万円、その他の収入として飲食事業、駐車場料金収入、物販販売等がある。

指定管理者制度を導入したことにより、約7%の経費削減効果があがっている。

●兵庫県姫路総合庁舎（屋上緑化；ムカデ芝）

表面温度の変化はほぼ一定であり、非緑化部分との温度差は夏季の最大時で20℃に及ぶ。また屋上の様子や温度は庁舎玄関のモニター及び電光掲示板によって、一目でわかるようになっていた。

●委員会の所見

施設の維持管理については、ボランティア団体の育成を図ることが急務である。屋上緑化については、視察地は屋上が平坦地での芝工法であったが、本市の設計では3,500㎡と広大かつ傾斜度が50 ～ 60度もあることから、芝の管理について特段の注意を要する。

屋上緑化された兵庫県立考古博物館

勾玉（まがたま）づくり体験の様子